



朝の散歩



4月24日早朝の県立美術館

私は天気の良い朝、自宅から大学まで三十分ほどの散歩を楽しみます。県立歴史博物館、護国神社、県立美術館と、小鳥のさえずりや風の音を聴き、青空や木々を眺めながら歩きます。特に四月は新緑が美しく、心が洗われ、厄介な案件を抱えていても明るく前向きな気分になります。

五感とは、外界と意識を隔てる透明な膜のようなものです。普段私たちの意識は、外界のさまざまな刺激を受けて流れていきますが、散歩をしているときほど、外界と意識の流れが、五感を通して自然につながっていくのを感じることがありません。この快感が、歩行そのものの快感とともに気分を明るくし、悩みを軽くしてくれるのでしょう。

二十世紀前半、このような五感と意識の流れに注目した文学、いわゆる意識の流れ文学が展開しました。イギリスの小説家ヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』はその代表的作品で、特に冒頭は、六月のある朝、陽光の降り注ぐロンドンの町を歩くダロウェイ夫人の意識の流れをみずみずしく描いています。

お花はわたしが買ってきましたよね、とクラリッサは言った。

だって、ルーシーは手一杯だもの。ドアを蝶番から外すことになるし、仕出し屋のランペルマイヤーから人が来る。それに、この朝！すがすがしくて、まるで浜辺で子供たちを待ち受けている朝みたい。

愉快、爽快—ブアトンではいつもそう感じた。フランス窓を勢いよく押しあげ（蝶番の小さなきしみがいまでも聞こえる）、開けた大気に飛び出していくときの愉快、爽快。早朝の空気のなんとすがすがしく、落ち着いていたことか。もちろん、ここより静かだった。波の戯れに似て、波のキスに似て、冷たくて鋭くて、でも当時十八歳だったわたしには厳かで、開いた窓の前に立っていると、いまにも何か恐ろしいことが起こりそうな気がした。花々を見て、煙のまとわりつく木々を見て、のぼつては下るカラスの群れを見て立ちつくすわたしに、ピーターが何か言った。「野菜に囲まれて物思いかい」だったかしら。「おれはカリフラワーより人間が いいぞ」だったかしら。ある朝、朝食どき、テラスでのことだった。*

皆さんも朝の散歩を楽しんで下さい。

📖 学長 内木宏延

*『ダロウェイ夫人』土屋政雄訳、光文社古典新訳文庫、2010年より冒頭を引用